

天理大学学報 第178輯
平成7年3月発行 抜刷

ロールシャッハ・テストの反応過程に関する
仮説の比較

川 畑 直 人

ロールシャッハ・テストの反応過程に関する 仮説の比較

川 畑 直 人

1 はじめに

ロールシャッハ・テスト（以下ロ・テスト）とは、「Helmann Rorschach が創案した10枚1組の多義的な図形を刺激材料として、個々人の行動や観念内容のサンプルを採取し、人格特徴の把握、理解を目的とする一種の心理診断法である」（片口，1987，p. 5）。このテストはいわゆる投影法形式の人格検査の代表格として、複数の施行・記号化・解釈法の体系が考案され、数多くの研究が積み重ねられるとともに、臨床場面において広く活用されている。しかし、すでに実践場面に普及しているという現状ゆえに、その実用上の価値を高めなくてはならないという要請が、研究の方向に暗黙の制約を課してはいないか、研究者は注意を払う必要がある（Mooney, 1962）。すなわち、現実には多くの研究は、既存の体系が提出している記号化と解釈の仮説を前提に進められているが、被験者の反応過程のメカニズムについての解明が、一定の合意が形成されるまで進んでいるのか、問直してみる必要がある。

創案者の Rorschach 自身が、このテストを知覚実験と命名したことを持ち出すまでもなく、このテストにおける被験者の反応過程に知覚の関与を認めない者はまずいないであろう。そして、このテストが人格診断法たり得る理論的根拠は、刺激の多義性と知覚の選択性に求められるのが常である。しかし、知覚に含まれる選択性と法則性の配分をどの程度に見積もるべきかは、大きな問題である。選択性を実際以上に大きく見積もるなら、そこにはいわゆる過剰解釈の危険が生じることになる。テストの堅実な発展を願うならば、反応生成過程の基本的なメカニズムがまず明らかにされ、そのうえに解釈仮説が積み上げられるべきである。Rorschach をはじめとして多くの研究者が、そうした基礎的な過程に言及していないわけではないが、解釈仮説との対応性も含め、実証的な検証は未だに十分とは言えないのが現状である。本論文は、今後そうした研究を進めて行くことも視野に入れ、このテストの反応生成過程について、代表的なロールシャッハ研究者達が、これまでどのような仮説を提出してきたかを、比較検討することを目的にしている。

2 Rorschach による反応過程の説明

はじめにこのテストの創案者である Rorschach が、このテストに対する被験者の反応過程をどのように考えていたのかみることにする。Rorschach の主著であり、また、本テストの原典でもある「精神診断学」（ロールシャッハ，1976）の冒頭部分で、彼はまず、このテストが一般に受け取られるような想像力の検査ではなく、むしろ知覚や統覚に基礎を置く検査であることを明言し、反応の過程について言及している。その際彼が依拠しているのは、彼の師でもある Bleuler の知覚理論である。ここでまず Rorschach による Bleuler の説の引用部分と、それに続く Rorschach 自身が反応過程について述べた部分を引用する。

「《もろもろの知覚は、次のようにして生じてくる。すなわち、諸感覚や諸感覚群が、以前の諸感覚群の記憶像をわれわれに再生させ、感覚記憶の一つの複合が、われわれのうちに浮かんでくる。この複合の要因は、以前の経験と同時に生ずることによって、特に緊密な関連を持ち、他の感覚群から区別されるのである。また知覚には、感覚、記憶、連想という三つの過程が存在している。——われわれは、諸感覚の複合をその内的関連をもって確認することを統覚と名づける。これは、知覚という狭い概念をも含んでいる。》(プロイラー：精神医学教科書、9ページ、シュプリングー書店、ベルリン、1916)

それ故、もし知覚が、最近獲得された感覚複合と現存する記憶痕跡(記憶像)との連想的同化であるというならば、偶然にできあがった凶形の判断は、感覚複合と記憶痕跡を同化しようとする努力が、努力しているという意識を伴う程、強い一種の知覚であると言ってよかろう。感覚複合と記憶痕跡が、完全には同じものでないというこの内的経験は、知覚に判断の性質を与えるのである。」(ロールシャッハ、片口訳、1976, p.6)

続いて Rorschach は、知覚と判断の違いに言及し、プロットの知覚の際に、判断しているという自覚がなく、一般の人が見慣れたものを見るように、プロットが何であるか「知ろう」とする人がいる一方で、単純な日常的な知覚ですら同化の努力を感じるような拘子定規の人(Pedant)や、同化作用自体が困難なうつ病患者がいるように、判断しているという意識の強さには個人差があるが、その差は質的なものではなく、程度の差であるとしている。つまり判断は特殊な知覚に過ぎず、このテストを知覚の検査とするのは正当であると Rorschach は主張する。

このテストに対する反応の基礎に知覚の過程が存在しているということ、テストの創始者である Rorschach が最初の時点で明言したことは、テストのその後の発展に一つの方向付けを与えたという点で重要な意味がある。ただ、彼の論旨を要約するならば、知覚過程そのものの定式化は Bleuler の理論に全面的に依拠するということである。すなわち、感覚複合と記憶痕跡の連想的同化という、当時の構成主義的な知覚理論が、インクプロットの知覚にも適用できるという見解である。Rorschach の死後1年して、Binswanger は、「精神診断学」の覚え書きを発表し、Rorschach が理論心理学の知識が十分でなく、またゲシュタルト学説を知らなかったことに批判を加えたとされるが(片口、1987)、確かに反応過程そのものの定式化としては、多くの要素が捨棄されすぎていると言わざるを得ない。彼の早逝も一因となって、多くの課題は後の研究に積み残されたというのが実情であろう。

3 Rapaport の貢献

周知のように、Rorschach が、37歳の若さで早逝した後、ロ・テストは米国に伝えられ、主に米国で発展・普及するという経緯を辿っている。そこで次に、米国において、心理テストの普及に大きな貢献をなした Rapaport の考え方を見ていくことにする。米国でのこのテストの普及には、Beck や Klopfer 等の貢献を見逃すことはできないが、彼らはスコアリングの体系化や反応の頻度の実証的研究、解釈仮説の背景となる人格理論の提出に力を入れた反面、反応過程そのものにはあまり言及していない。

Rapaport は、ハンガリー出身の臨床心理学者、精神分析学者で、精神分析学的自我心理学の立場から、アカデミックな実験心理学と臨床心理学、精神分析学との橋渡しの研究を精力的に行った学者である(秋山、1961)。そして、ロ・テストにおける反応過程についても、彼

独自の思考過程の理論を用いて、かなり詳しく論じている。

ロ・テストに関する彼の考え方は、“*Diagnostic Psychological Testing*” (Rapaport, Gill & Schafer, 1968) のロ・テストの章に見ることができるが、彼はその中の「ロールシャッハ反応の基礎となる心理過程の一般的理論的根拠」という一節で、反応過程について論じている。彼の基本的な考え方は、インクプロットに反応する際に働いているのは、主に知覚過程と連想過程の二つであり、しかもその両者は分かち難く互いに噛み合っており、その噛み合い方 (cog-wheeling) を見ていくことが、診断的に反応を解釈していくことにつながるというものである。以下、彼の記述に沿いながら見ていくことにする。

まずはじめに、Rapaport は知覚一般の性質について整理している。基本的に知覚は、写真のように外界の事物をそのまま写し取るのではなく、純粹感覚経験に加工が施されたものと考えられる。つまり知覚において刺激は、複雑な受容系に取り入れられ、この受容系は生体の基本的な欲求や関心によって構造化され方向付けられ、また最近の経験によって構えを作られる。したがって、従来のように知覚と統覚とをことさら区別する必要はなく、インクプロットの知覚と一般の知覚は同次元で捉えうる。そして、インクプロットの知覚は、組織化する側面 (organizing aspect) がより広範で顕著な知覚として位置づけられることになる。

一方、連想過程であるが、「何に見えるか」というロ・テストの教示は、「インクのシミ」と答えることを暗に制限しており、しかも反応すべき内容はインクプロットの中に与えられていないので、被験者は刺激に関する新しい観念を、内的な観念、イメージ、関係から引き出さなくてはならず、そのためには連想の働きが不可欠である。その意味で、被験者のインクプロットへの反応は、プロットの刺激によって開始する連想過程として捉えられる。その際、馴染みがないというプロットの特徴ゆえに、被験者固有の連想的思考のパターンや困難さが、前面に出てきやすくなる。

このようにロ・テストへの反応過程は、知覚過程としても連想過程としても捉え得るが、ロールシャッハ反応の中には、そのどちらの過程も含まれていると、Rapaport は強調する。被験者を理解する上で、いずれかの過程に焦点を当てることは有益であるにしても、本質的には両者は統合されていることを見逃してはならないというのである。

「連想過程を含まない知覚的な組織化はありえないということを、われわれはすでに示してきた。また、(中略) 以前意識にあった知覚物に依拠しながら、連想過程の中で視覚像の段階が生じることも多い。知覚物は、それ自体が組み込まれる連想過程から意味を派生させ、逆に連想過程は、知覚物や知覚物に喚起される像を、自らの過程に組み込むことで現実と噛み合うようになる。知覚物や像は思考過程にとって方向付けの手がかりとなる。つまり、方向変換の必要性や終結のポイントを示し、連想過程を現実の要請に結び付け、野放しに暴走したり主観的願望のおもむくままになることを防ぐのである。このように知覚されるものと連想されるものは、円滑に機能している生体においては、互いに依存しあい、互いに刺激しあい、導きあい、制限しあうのである。」(Rapaport et al., 1968, p.274)

このように知覚過程と連想過程の統合されたあり方を強調した上で、彼はロ・テストへの反応過程を、以下の3つの段階に分けて定式化している。

第一段階は、プロットの際だった知覚的特徴が連想過程を開始させる段階である。被験者は、非構造的なインクプロットに対して、漠然とした知覚体験を持ち、その体験が連想過程を

開始させ、知覚的印象の特徴と一致するものの記憶（観念やイメージ）が呼び起こされる。そして、知覚的印象に触発され、「何に見えるか」という教示の要請を満たす観念を探し求めて進行していく連想過程は、知覚的印象とイメージが融合・一致する観念に到達するまで続く。こうした融合や一致は、思考過程の側面からみれば概念形成にあたるもので、反応過程において特に重要な要素となる。

第二段階は、連想過程が、部分的な知覚的印象を越えて進行し、プロットの集中的な組織化と精緻化に影響を与える段階である。つまり、連想が進む中で、知覚の体制化に変化が生じるが、その際に、連想過程が知覚素材の構造化（structurization）や分節化（articulation）に影響を与えるのである。例えば、輪郭全体を前面に出したり、部分に注目させそれに固執させたり、あるいは部分と他の部分とを統合させたりするのに、連想過程が一定の役割を果たすことになる。

第三段階は、インクプロットの知覚的な潜在可能性と有限性が連想過程そのものを規制する現実として作用する段階である。知覚素材と知覚過程には、プレグナンツ、閉合、図と地といった法則が内在することを、ゲシュタルト心理学が明かとしてきているが、こうした個人の傾向から独立した機能が、連想過程の進展を規制し、制限を与えるのである。

以上のように、Rapaport は一貫して、反応過程における知覚と連想の不即不離の關係に注目しており、そうした視点から反応過程を定式化している。反応の基礎となる心理過程を理解する基本的枠組みを提出し、このテストの診断的有用性の理論的な根拠を明確化したという点で、彼の功績は非常に大きい。ただ、彼の定式化を理解する上で、いくつか留意すべき点があるように思われるので、それらについて若干指摘しておくことにする。

第一に、知覚に関する Rapaport の捉え方であるが、彼が指摘しているとおりに、知覚が外界の現実をそのまま写し取るものではなく、外界からの入力情報を生体が様々な形で取捨選択・組織化することによって成立するものであることは、現在では知覚に関する共通の認識と言えるだろう。そして、その組織化の過程に、生体の欲求、願望、動機といった側面が影響を与えるという点も、ほぼ異論はないと思われる。しかしながら、その影響の大きさをどの程度見積もるべきかという点に関して、彼の議論にはややあいまいさが残るように思われる。知覚が外界の生の写しでないことは、最近の認知論的な知覚研究や視覚生理学のレベルでも言われることであるが、そうしたレベルの事象はむしろ知覚の法則性に属するものであり、そこから知覚の個人差の根拠を引き出すことは難しい。彼の見解は当時隆盛であったニュールック心理学の流れに沿ったものと受け取れるが、現在の知覚研究の成果も踏まえて、プロット知覚の個人差がどのレベルで生じるのか、さらに研究が必要であろう。

第二に、連想過程についてであるが、Rapaport が言及する連想過程は、主に言語連想検査の課題を果たす際の被験者の心的過程をモデルにしており、彼はそれがロ・テストにも当てはまるとしているが、反応すべき一つの連想語に到達することで課題が終了する言語連想検査と違って、ロ・テストの場合、言語化される内容は単一概念にとどまるとは限らない。図版を見た際の感想、部分の明細化、運動に関する言及、作話的な内容の展開など、そこに働く連想過程は多岐にわたっており、それらは被験者の個性を読みとる際の重要な情報であるだけに、さらに踏み込んだ議論がなされるべきであろう。

第三に、彼が定式化した反応過程の段階モデルは、実際の時間的経過に沿った過程の定式化とは異なるように思われる。例えば、彼は反応の第3段階を、ゲシュタルト法則などが連想過程に現実としての制限を課す過程としているが、そうした知覚の法則は時間的な経過に照らし

てみれば、反応の最初期、つまり視覚刺激の入力と同時に働き、視覚像の成立に寄与するはずである。従って、彼の提示した反応過程の段階モデルは、知覚過程と連想過程の噛み合い方を3つの局面に分けて述べたものと理解するのが妥当と思われる。ただし、彼の記述の仕方に時間経過を意識した部分もあり、その点にはあいまいさが残っている。

4 Exner による反応過程の定式化

知覚過程と連想過程の相互関連によって、反応過程を分析した Rapaport の定式化は、テストの性質を理解する上で非常に大きな貢献であると言えるが、彼の定式化は理論的考察という性格が強い。そこで最後に、これまでの様々なロ・テストの研究成果を総合し、実証研究の成果を踏まえつつ、テスト体系を総合したとされる Exner の見解を見ていくことにする。Exner は彼の著書、*“The Rorschach: A Comprehensive System Volume 1”* (Exner, 1986) の中で、「ロールシャッハ・テストの性質」という章を設け、それを主に反応過程の分析に当てている。

そこでまず彼は、ロ・テストのテスト状況を、プロットを実際にはそうでない何かに変換すること、すなわち刺激の誤った同一視 (misidentification) が要求される状況であると規定する。それはある意味で現実の歪曲を必要とする課題解決状況と言えるが、一方で自分の体面を保ちたいと願う被験者にとっては、複雑な心理的な働きが刺激されるなかで、複数の潜在反応の中から最終的に言語化するのに適切と考えられる反応を選択することが、大きな課題になるというのである。

次に問題となるのは、最終的な反応選択が行われる前に、どれくらいの潜在反応が産出されるのかという点である。この問題に答えるために彼は、60秒間にできるだけ多く反応するように教示した彼ら自身の研究を引用している。結果は、例えば正常群 (MMPI の K 尺度の上位半数、N=20) の場合、10枚の図版に対して、60秒間で平均83.3個の反応が産出され、形態水準は $X+\%=85.1\%$ であったという。この結果を基に Exner は、正常群、病理群を問わず、ほとんどの被験者が、比較的短い時間内に、プロットの刺激と大体一致した多くの潜在反応を形成できると結論づけている。そして、標準的な方法で得られる平均反応数が約22であることから、被験者は利用できる潜在反応の25%以下しか答えていないと推定され、その理由や解釈上の重要性を理解するために、反応過程に含まれるいくつかの要素を考慮する必要があるとしている。

Exner の定式化したロ・テストの反応過程は、以下の6つの要素からなる。

①入力過程：視覚刺激の一種であるインクプロットの視覚情報を入力する過程である。Exner はプロットに対する視覚的走査活動に関する自身の研究から、I 図版とIII図版に対する眼球活動の軌跡を紹介し、この段階での視覚情報の処理がきわめて迅速に生じている点を強調している。

②刺激全体とその部分の分類：情報入力後、それが符号化されて、短期貯蔵に保持され、長期貯蔵からの資料と比較され、刺激全体やその部分が分類、誤った同一視をされる過程である。この過程に関連して Exner は、刺激領域の部分によって分類のしやすさが違うこと、プロットには分類過程に寄与する重要な刺激要素が含まれていることを指摘し、さらに瞬間露出器を用いたいくつかの研究結果から、露出後2秒から3秒の間に、刺激を符号化し、少なくとも3つの潜在反応を分類することが可能であろうと述べている。

③順位付けによる潜在反応の放棄：経済性の原理によって、潜在反応のうちのいくつかは放

棄される過程である。経済性への指向に寄与する第一の要因には、このテストを答の正誤、得点の高低、可否といった教育モデルで捉える傾向があり、効率性の追求や防衛的な隠べいが生じる土壌となる。経済性への指向に寄与する第二の要因は、順位付けの過程であり、潜在反応のうち、どちらがよりそれらしいかといったある種の対比較による順位付けが生じていると考えられる。Exner は特にこの第二の要因を重視している。

④検閲による放棄：何らかの先入観や構えによって、反応に対して否定的な価値判断がなされると、検閲によってその反応は放棄される。社会的に受け入れられる反応をしようとする指向性の強さ、検査者と被験者のラポールの要素が影響すると考えられる。例えば、同じ反応でも「分裂病者の反応」と教えられるより「正常者の反応」と教えられた方が、被験者は自分にも見えると評定しやすい。

⑤様式、特性と選択過程：個人の基本的な心理的特徴、すなわち心理的習慣、特性、様式、傾向と呼ばれるような、パーソナリティ構造の支配的な要素の集合が、どの反応を述べるかの最終的な決定に影響を与える。これはロ・テストの結果が個人のパーソナリティを反映する根拠と考えられるが、Exner はロ・テストの信頼性を支持する研究を紹介した上で、そうした結果は、被験者の特性や様式がどの潜在反応を述べるかの選択に大きな影響を及ぼすという主張を根本的に支持していると結論づけている。

⑥心理状態と選択過程：ロ・テストを受けている人の心理状態が、述べられる反応の最後の選択に寄与する。心理状態の多くは一時的なもので、上述の信頼性に関する研究で、高い信頼性係数を得られなかったロールシャッハの指標は、そうした一時的な心理状態を反映すると Exner は考えている。そして、その例として、最近の喪失体験と材質反応の増加の関連を挙げている。また精神病理状態のように、本来のパーソナリティ構造を覆ってしまうような場合、その持続する長さに比例して、選択過程への影響も続くであろうと述べている。

以上のように反応過程で生じる6つの働きについて述べた上で、Exner はそれぞれの働きにある程度の重複が生じることも考慮に入れ、①と②、③と④、⑤と⑥をまとめ、三段階の反応過程のモデルを定式化している。彼の見解をまとめれば、刺激の入力とその分類という反応過程の第一段階で相当数の潜在反応が産出され、反応過程の残りの大部分は潜在反応の取捨選択過程であるということになる。時間的な経過については確定的に述べているわけではないが、図版呈示後2、3秒の間に第一段階の刺激入力、分類がなされ、初発反応時間の平均がおおよそ7秒であることから、残りの4、5秒間に第二段階、第三段階の選択過程が進み、最終的な反応の言語化に至るとというのが、彼の考えのようである。

Rorschach や Rapaport の定式化と比較してみると、Exner の定式化にはいくつか注目すべき点がある。第一に、定式化にあたって実証的な研究成果をふんだんに取り入れている点である。他の研究者による研究を通覧すると同時に、彼自らも多くの実験を試みており、実証性を高めようとしている。

第二は、潜在反応の存在に注目し、その取捨選択過程を反応過程の定式化に含めている点である。対人関係を含むテスト状況において、反応を検査者に伝達するという課題が重要な意味を持つということは、すでに Schachtel が指摘しており（シャハテル、1975）、このテストの反応過程を考えるにあたって見逃せない点である。実際のテスト場面における反応の取捨選択が、Exner の言うように定式化できるかどうかは別としても、取りあえずこの過程を反応過程の要素に取り上げた点は評価できる。

このように、いくつかの点で、Exner の定式化には注目すべきものがあるが、果して実際

の反応過程にあてはまるのかを考えると疑問な点も多い。まず、複数の潜在反応の産出後に、反応の放棄がなされるという彼の見解であるが、全ての被験者、また全ての反応において、そのような段階が踏まれるのかには疑問が残る。例えば、図版を手渡されるなり最初の着想を言語化する被験者や、図版の部分を探検しながら見える領域を見つけ次第言語化していく被験者の場合、このような定式化はおそらくあてはまらないであろう。そもそも彼は、短時間になるべく多く反応するよう教示した実験の結果を、多数の潜在反応の存在を推定する根拠としているが、この実験結果はその気になれば多くの被験者が短時間に多くの反応を言うこともできるという、可能性を明らかにしているのであって、標準的な教示の下でも被験者が同じように潜在反応を多産するのかどうかは別問題である。また、反応の取捨選択の過程が存在するとしても、Exnerの言うように潜在反応の産出と取捨選択の二つの過程を段階的に分割できるかどうかは疑問である。両過程はもっと相互に入り組んでいる可能性がある。また彼は、信頼性係数の高いロ・テストの指標は、個人の特性、様式による選択過程の違いを反映するとしているが、それでは潜在反応が生み出される段階ではそのような個人差は作用しないのであろうか。彼の主張をいささか極端に解釈すると、反応の第一段階では、誰もがおおよそくまなく様々なタイプの潜在反応を産出するものと読み取れるが、それは現実味のない主張である。むしろ、経済性の原理、テストに対する構えや先入観、個人の様式、心理状態といった様々な要因は、反応の選択過程だけではなく、刺激入力と分類の過程にも影響を及ぼしているとするのが妥当と思われる。このように、潜在反応の産出過程と反応の選択過程を段階的に分割し、テスト結果に現れる個人差を主に選択過程のみによって説明しようとしたExnerの定式化は、多くの疑問点を含んでいる。

5 まとめと今後の課題

以上、Rorschach, Rapaport, Exnerの3人の、ロ・テストの反応過程に関する説明を概観してきた。今回取り上げたのは、彼らの著作の一部であり、これは反応過程に関する彼らの考えの全てとは言えない。それぞれの反応過程の捉え方は、スコアの体系、解釈法に関する議論など、テストに関する記述全体の中に、当然浸透し反映されてくるはずだからである。しかしながら、三人の研究者が反応過程をどのように捉えているか、大枠の理解は得られたものと思われる。

3人の考え方を比較して基本的に言えることは、反応過程の定式化においては、ロ・テストの研究者間でも、一致した見解が得られているわけではないということである。またそれぞれの定式化には、長所、短所ともに含まれており、解釈仮説の理論的根拠を求める基礎としては、いずれも完全とは言えないものである。こうした現状の背景には、そもそも反応過程そのものの議論が十分なされてこなかったという実情があるのであろう。それには、はじめに触れたように、多くの臨床心理学の研究者や実践家にとって、反応の基礎となる過程の解明よりも、まずはスコアの信頼性や妥当性が切実な問題になるということが影響しているのかもしれない。また反応過程の解明に着手しようとするれば、その過程に関わる心的活動（例えば、知覚、概念形成、連想、思考、問題解決、態度決定等）の多種多様さが研究を難しくしている面もある。いずれにせよ、テスト場面で生じている現実に対応した生態学的妥当性のある定式化を行うためには、今後一層の研究が積み重ねられる必要がある。

(引用文献)

- 秋山誠一郎 1961 David Rapaport 博士の逝去を悼む ロールシャッハ研究III 牧書店 239-242
- Exner, J. E. 1986 *The Rorschach: a comprehensive system. Volume 1*, Basic Foundation. John Wiley & Son (高橋・高橋・田中監訳 現代ロールシャッハ・テスト体系上 1991 金剛出版)
- 片口安史 1987 改訂・新・心理診断法 金子書房
- Mooney, B. 1962 Personality assessment and perception. In M. Hirt (Ed.), *Rorschach science: Reading in theory & method*. The Free Press of Glencoe.
- Rapaport, D., Gill, M. M. & Schafer, R. 1968 *Diagnostic psychological testing*. International Universities Press.
- ロールシャッハ, H. 片口安史 (訳) 1976 精神診断学 金子書房 (Rorschach, H. 1921 *Psychodiagnostik, Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments*. Bern : Erunst Bircher)
- シャハテル, E. G. 空井健三・上芝功博 (訳) 1975 ロールシャッハ・テストの体験的基礎 みすず書房 (Schachtel, E. G. 1966 *Experiential foundation of Rorschach's Test* New York : Basic Books)